

I 事業の概要（地域の実情含む）

1 岩泉町

北上山地の東部に位置し、992.36平方キロメートル（東西51km、南北41km）の本州一広い町である。盛岡市など3市1町3村に隣接し、東方は北部陸中海岸の太平洋に臨む。耕地面積は少なく、林野率が高い。小本川、安家川、撰待川の流域に沿って集落を形成しており、人口は約9,000人である。

安家地区から岩泉地区に延びる石灰岩層は、日本三大鍾乳洞のひとつとして名高い龍泉洞をはじめ、氷渡洞、安家洞などの鍾乳洞群を形成している。

東日本大震災津波による小本地区の復興半ば、2016年台風10号（以下、台風10号）豪雨災害で町の多くが被災。また、2019年発災の台風19号でも小本地区を中心に被災した。

2 岩泉高等学校

地域の青少年教育の必要性が高まる中、凶事・凶作の解決のために町立農業学校として1943年に設置された。現在は県立の普通科高校、岩泉・田野畑地域唯一の高校として、今年度は創立80周年を迎え、122名の生徒が在籍している。

3 復興教育について

地域の特質や課題を踏まえつつ、年間を通して継続的に防災・復興教育に取り組み、これまで発生した災害と、今後起こり得る災害について学ぶ。

また、これからの地域の復興に向けて、自身の将来と地域の現状を関連づけて考察することとおして、郷土を愛し、その復興・発展を支える意欲を涵養する。

II 取組の概要

1 避難訓練（5月23日）

迅速かつ安全な避難を行い、災害時に備えることをねらいとして実施した。ここ数年は地震を想定した訓練であったが、今年度は火災を想定とした訓練とし、消防署員は立ち会わずに学校独自の実施とした。



【避難訓練の様子】

2 SDGs 演習（6月2日）

昨年度に引き続き、NPO 法人環境パートナーシップいわてから丸尾美由紀氏を招き、2年生対象におこなった。1年次に探究学習で学んだSDGsの視点について、演習を通して検証し理解を深めた。



【SDGs 演習の様子】

3 学校安全研修

(1) 職員対象：救命救急講習（6月12日）

毎年この時期に教職員の研修の一環としておこなっている。10月に生徒を対象とした救命救急講習の実施を控えて、AEDの使用法や心肺蘇生法の講習を行った。



【救命救急講習（職員）の様子】

(2) 生徒対象：救命救急講習（10月24日～26日）
 全校生徒を対象に、学年ごと実施日を変えて行った。AEDの使用法や心肺蘇生法の講習を行うことで、生命の大切さや、事故や災害の当事者として一人ひとり何ができるかを学んだ。



【救命救急講習（生徒）の様子】

4 復興教育

(1) 復興教育事業当日

ア 1学年（10月19日）

午前中は東日本大震災津波伝承館、うのすまい・トモスを訪問し、担当職員から説明を受けて、当時の被害状況や現在までの復興の現状を知ることができた。午後は大槌高校復興研究会を訪れて交流をおこなった。交流会では、大槌高校復興研究会より、東日本大震災が起きた時の高校の様子や、復興研究会の歴史、活動内容等についての発表を聞き、その後、ゲーム形式で災害時の行動を判断したり、ミニディベートで全体の意見共有をしたりしながら、互いの異なる意見から新たな視点を得て、考えを深めた。地域を支える人材を目指す岩泉高校生として、自らの役割を見出し、地域に貢献する大槌高校生の姿に、大いに刺激を受けた。



【1学年 交流会の様子】

イ 2学年（10月18日～20日）

岩泉町、普代村、田野畑村、宮古市4市町村あわせて26の事業所にてインターンシップを行った。企業での就労体験を通じて、企業や業界が抱える課題と向き合い、よりよい労働環境を実現するための解決策の考案までをゴールに探究した。インターンシップをとおして地元の良さを再発見するとともに、働くことの意義を培った。



【2学年 インターンシップの様子】

ウ 3学年（10月19日）

午前中は町内のNPO法人クチェカより、鈴木悠太氏と千葉慎也氏から「共助」についてワークショップと講演会を行い、自己の課題を共有

しながら、助けて欲しい人がいるから、助けてあげる人も存在できる「共助」の形を学んだ。

午後は「応急処置」の知識を取り入れて、自分の出来ることを増やそうという視点で、岩泉町危機管理課の方々を講師に、具体的な行動を学んだ。



【3学年 「共助」について学ぶ】



【3学年 応急処置の知識を学ぶ】

(2) 復興を考える科学的思考力養成講座

(11月17日)

岩手大学理工学部の高木浩一教授を招き、1学年対象に、探究学習の基本ともいえる科学的な思考力や、その視点について、実演実験を交えながらガイダンスいただいた。



【講座での実験の様子】

5 郷土芸能フェス (11月4日)

道の駅いわいずみを会場に、「地域復興支援 郷土芸能フェス」と題して開催。「自分たちが活動する郷土芸能を地域の活性化に生かせないか?」という本校生の声をきっかけに、教職員を動かし、地域を巻き込み、そして趣旨に賛同した県下の高校生が岩泉の地に集い実現した。郷土芸能の取り組みを地域復興に生かす、本事業の一環としても位置づけた。また、高校生を中心に企画し、内容から運営まで高校生が担うという、県内初の郷土芸能イベントとして、岩手日報社、IBC岩手放送など報道各社も注目した。





【郷土芸能フェスの様子】

6 児童生徒実践発表会（1月26日）



【パネルディスカッションの様子】

盛岡市民文化ホールを会場におこなわれた本事業の児童生徒実践発表会パネルディスカッションに代表校として参加した。同じく代表校であった大船渡高校、金ヶ崎高校、大迫高校の生徒らと、観衆を前に、自校の取り組みや他校の実践に関心が及んだことなどを議論した。

- 7 復興教育を終えて（生徒レポートから一部抜粋）
大槌高校との交流を通して
- ・自分たちと同世代の高校生たちが、震災当時の避難所運営に携わっていたことに驚いた。
 - ・10年以上前の出来事や震災から得られた教訓が、今の大槌高校生にもしっかりと伝わっている。
 - ・復興や防災に対する高い意識や強い責任感が感じられて、すごいと思った。
 - ・自分とは比べ物にならないほど深く真剣に「我が事」として震災に向き合っていて、考え方がとても現実的だった。
 - ・何が正解かはわからないけれど、日常の何気ない判断を一つひとつ大切にしていくことが、いざという時の大事な判断につながるのだと感じた。

III 取組の成果と課題

1 成果

本校では、過去の東日本大震災や台風10号被害の経験から、主として「防災」に重点を置いて復興教育に取り組んできた。また、救命救急講習の実施をとおして、自他の生命尊重の精神を育てることもできている。さらに今年度は、「復興」の視点も増やして、郷土芸能を取り入れた地域づくりをねらいとした郷土芸能フェスをおこなった。自校だけではなく、郷土芸能活動に取り組む他校とも連携・協働して、地域の人々に活力を与え、報道等により本事業の一層の深まりを情報発信することができた。

2 課題

今年度は新たな復興教育に関する取り組みを進めることができたが、元旦早々の能登半島沖地震による災害など本県のみならず、自然災害との向き合うことが全国的な関心事になっている。復興教育そのものが本県の発展に寄与するだけではなく、全国さまざまな地域との「つながり」のツールとして利活用できるようにすることも課題の一つだと考える。自然災害に対応しつつ、いかにより良い社会を築くか、事業を継続させるなかで、復興教育をキーワードに他県と交流できるような取り組みも加味しながら、実現可能な計画を立案していきたい。